



学校data
1903年創立／普通科／生徒数479人(男子259人・女子220人)／進路状況(2015年3月実績)／大学139人・その他20人



かえつ有明中・高校(東京・私立)

大学進学実績よりも「学びの環境」で生徒や保護者を惹きつける学校に

知識を流し込む授業から
生徒が自ら思考する授業に

かえつ有明中・高校は、これまで難関大学進学実績を伸ばしてきたが、そこに甘んじることなく、約10年前から教育改革を進めてきた。その原動力となったのは、時代の変化に対する危機感だ。「学校から塾まで、受験のための教育が発達するなかで、生徒は自分で考えるより、与えられた知識を流し込むようになり、一方で社会では、インターネットの普及で世の中に情報があふれ、知識を覚えることよりもそれをどう組み合せて活用するかが重要になりました。グローバル化で世界中の人と競う時代となり、人工知能も台頭してきています。言われたことだけをやる働き方ではもう通用しません。ですが日本では海外と比べてクリティカルシンキング(批判的思考力)が育っていない。教育を見直したい、そう思って取り組んだのが、答えのない問いにも挑んで思考力や感性を伸ばす『21世紀型学習』です」(山田英雄先生)

なぜ日本では考える力が育たないのか。同校はその二因を「思考の仕方を知らないからではないか」と考えた。「欧米では子どもたちに、思ったことを5W1Hや「think..because...」といったロジックを組み立てて表明させることを義務教育からやります。異文化が混在する欧米では、考えをロジカルにまとめて相手に伝えることが重要だからです。日本でもそうしたトレーニングをすれば、思考の土台を築けるのではないかと考えました」(山田先生)

そこで、中学校の総合的な学習の時間を「サイエンス科」と改称。高校の総合学習の時間と合わせて、教科横断学習の中で、情報の収集・分析・統合・創造的な表現といったプロセスを生徒がきちんと学べる枠組を作った。答えを教わるのではなく、「自分なりの答えを導き出すための思考プロセス」をトレーニングしていくのだ。2015年度からは、英語を使ってリサーチ・議論・プレゼンなどに挑む、いわば英語で思考するプロセスを学ぶ教科「Language Arts」も導入した。

かえつ有明中・高校の教育改革

学校が抱えていた課題感

情報化・グローバル化・人工知能の進化などにより、自分で考えることが求められる時代に、与えられたものを学ぼうとする生徒が未だ多いことに、その子たちの将来への懸念と、学校のあり方への疑問を強めていた。

目指した姿

生徒が自分で考え、自らの可能性と向き合っていく
生徒が思考をめぐらせ、自分のことや世の中のことを学ぶを通して、やりたいことが見につき、自身の良さも引き出されるようにする。2020年をめどに、進学実績よりも、その学びの環境が売りになる学校を目指す。

取り組み内容

- 「思考のトレーニング」の充実
「グローバルなマインド」(ロジカルな思考など)の育成
- ◆「サイエンス科」(中学校)や「総合学習」(高校)の教科横断学習で、クリティカルシンキングやロジカルな思考・表現を鍛える
 - ◆「Language Arts」の授業で英語での思考・表現を鍛える
 - ◆「知のコード」(学びの到達度の評価基準)や、「思考力入試」「難関思考力入試」で、「思考するとはどういうことか」を明示
- 「感性を育む」「自分と向き合う」環境の整備
- ◆「入学オリエンテーション」など安全・安心に自分を出せる場を設定
 - ◆「プロジェクト科」の授業で、生徒が自分の興味・関心を掘り下げる
 - ◆「知のコード」や「難関思考力入試」で、「周囲と関わりながら自分と向き合うことが大事な学びである」ことを明示



左から
教育統括部長 佐野和之先生
国際交流部長 山田英雄先生
教諭 金井達亮先生

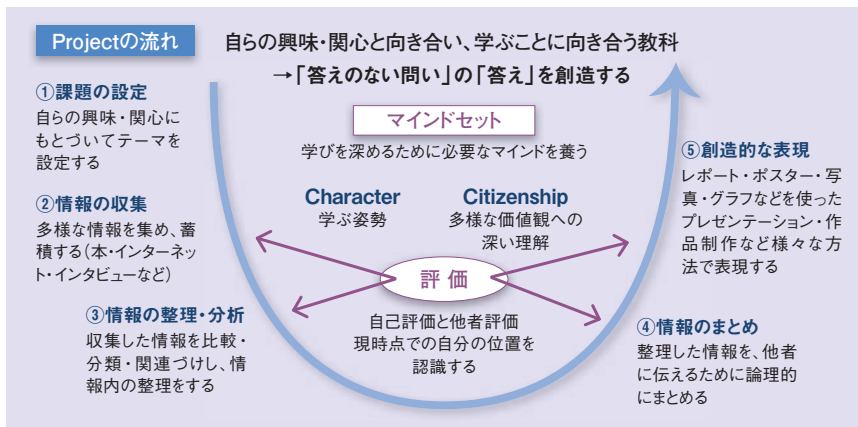
課題は与えるのではなく
生徒が自分で見つける

では、「思考の仕方」を学んだ生徒たちは、そのスキルで何を考え、どんな課題に挑んでいけばいいのだろうか。「そこは私たちが押し付けられないように

したいのです。先のことは予測できない時代。教員がゴールを決めてそこに向かわせるのではなく、生徒が自分を知り、世の中を知るなかで、やりたいことを自分で見つけてほしい。そのためには「これが面白い」「好き」と気づけるような感性を育むことも大事です。生徒が自分

取材・文／松井大助

図1 プロジェクト科の取り組み



と向き合える環境を作ることにも重視しています」(佐野和之先生)

感性を育む場作りを牽引したのが、佐野先生と金井達亮先生だ。高校から入学する生徒たちに対してオリエンテーションプログラムを編成。体を使うワークや共感的コミュニケーションで生徒が心をオープンにしやすい場を整えた。「心がけているのは、まずは『安全・安心の場』を作ることです。それさえできれば、あとは仲間や僕らとの対話など、周

図2 答えのない問いに対する評価指標となる「知のコード」

	論理	倫理	美学
離	批判—創造	脱慣習段階	自己—世界
破	分析—統合	慣習段階	自己・社会・自然
守	知識—理解	前慣習段階	自己—他者

リベラルアーツ=感性教育



教科横断学習や英語学習で思考を鍛えることは山田先生が主導。当初は戸惑う先生も多く、浸透には3年以上かかったという。



生徒の興味・関心を探究するプロジェクト科。先生たちは今も「つい生徒を誘導したくなる」葛藤を抱えているようだ。



入学式前に高校クラスが体験する体を使ったワーク。安心して言葉や体で表現していいという感覚をまずつかんでもらう。

「場を作る人の『あり方』が重要ではないかと金井先生は考える。「アクティブラーニングの手法を取り入れても、僕ら教員に『生徒を思い通りに教えたい』というマインドがあると、場をコントロールしてしま

い、生徒が自分を出せません。教員が自分が必要なマインドにあるか、『あり方』を常にふり返ることが大事だと思っております」(金井先生)

能動的な学習スタイルを評価基準や入試でも明示

先生が「あり方」をふり返っていきけるように、また、そうして目指す学びの方針を生徒や保護者にも示せるように、かえつ有明・中高校ではプロジェクトチームを立ち上げ、そのチームを中心に教員全体で「知のコード」と呼ぶルーブリックも開発した(図2)。思考するとはどういうことか(知識理解から創造まで)、どんな感性を育むか(他者や世界と関わる際の美学をもつなど)、要は何ができたら学びが深まったとみなすのか、学校の評価基準をまとめたのだ。生徒は思考力や感性を育むことを自覚しやすくなり、先生は「生徒のどこを評価していくか、自分の授業が一部の学びに偏っ

ていないか」を省察しやすくなった。さらに知のコードをもとに評価する「思考力入試」「難関思考力入試」も入試方式の一つに導入。受験者は年々増え、今や定員の倍以上を集めている。

生徒からは「サイエンス科の授業と同じ要領で考えたらセンター試験を解けた」「授業で『モヤモヤ』と向き合うと成長する」といった声上がり、学びの質の変化にも手ごたえを感じている。

かえつ有明中・高校としては、2020年をめどに、学校の主要情報から「大学進学実績を削りたい」そうだ。大学は「ゴールではない。就職もゴールではない。高校も大学も、目先の進路実績よりも、自分のやりたいことが見つけられ、自身の良さも引き出され、自らの可能性に向き合える学びの環境であること」のほうで何よりも生徒や保護者を惹きつけていく。これからの学校はそうありたい、と考えているからだ。

困との関わりを通して、生徒の内に眠っていたものが表出してくると感じています」(佐野先生)

また、高校部に設けた教科「プロジェクト科」では、生徒が自分の興味・関心をもとにテーマを設定、そこを掘り下げのりにロジカルな思考も使うという、生徒が主体的に感性から思考力まで発揮していく授業を行っている(図1)。

そうして生徒が能動的に学ぶ、アクティブラーニング型の授業を行うには、

「場を作る人の『あり方』が重要ではないかと金井先生は考える。「アクティブラーニングの手法を取り入れても、僕ら教員に『生徒を思い通りに教えたい』というマインドがあると、場をコントロールしてしま

い、生徒が自分を出せません。教員が自分が必要なマインドにあるか、『あり方』を常にふり返ることが大事だと思っております」(金井先生)

能動的な学習スタイルを評価基準や入試でも明示

先生が「あり方」をふり返っていきけるように、また、そうして目指す学びの方針を生徒や保護者にも示せるように、かえつ有明・中高校ではプロジェクトチームを立ち上げ、そのチームを中心に教員全体で「知のコード」と呼ぶルーブリックも開発した(図2)。思考するとはどういうことか(知識理解から創造まで)、どんな感性を育むか(他者や世界と関わる際の美学をもつなど)、要は何ができたら学びが深まったとみなすのか、学校の評価基準をまとめたのだ。生徒は思考力や感性を育むことを自覚しやすくなり、先生は「生徒のどこを評価していくか、自分の授業が一部の学びに偏っ